

# 名古屋大学の教育の質向上に有効な 教員・学生・大学組織の実践手法

## —『優れた授業実践のための7つの原則』 のチェックリストを用いた調査—

中 井 俊 樹\*  
中 島 英 博\*\*  
近 田 政 博\*\*\*

---

### —＜要 旨＞—

本稿の目的は、米国で開発された「優れた授業実践のための7つの原則」の学生・教員・大学の三種類のチェックリストを用いて、名古屋大学の教育実践の現状を明らかにするとともに、名古屋大学の現場において有効な教員・学生・大学組織の実践手法を明らかにする点にある。学内において実施した調査を通して明らかにされたことは以下のようにまとめられる。

米国で開発された実践手法が、名古屋大学においても概ね実施が望ましいと見なされていることが明らかにされた。各チェックリストに示された実践手法を取り入れるべきかという問いに対して、全般的に肯定的な回答が多かった。現在ほとんど実践していないが実践すべきであるとの回答を得た実践手法も少なくなく、現状の教育実践を改善する方針としても有効である。そして、成績優秀者ほど多くの実践手法を実践していることもわかり、学習成果と実践の間の相関関係が明らかにされた。

これらの調査結果は、名古屋大学の教育の質向上に有効な教員・学生・大学組織の実践手法を明確にする。それは、教育活動に関わる主体としての学生・教員・大学の三者の役割、責任、およびその相互関係を明らかにすることにつながり、特定の主体の努力に過度に依存しない教育の質向上の方法論を開拓できる可能性がある。

---

\* 名古屋大学高等教育研究センター・助教授

\*\* 三重大学高等教育創造開発センター・助教授

\*\*\* 名古屋大学高等教育研究センター・助教授

## 1. 研究の背景

現在の大学において求められているものの一つは、それぞれの大学に適した教育の質向上のための具体的方法の開発と実施である。その方法を考案する上で、1980年代後半において米国高等教育学会の研究グループによって開発された「優れた授業実践のための7つの原則」（以下「7原則」）を検討することは、有効であると考えられる（Chickering & Gamson, 1987; Chickering et al., 1989a, 1989b, 1992）。「7原則」は、全米をはじめ英国やカナダの多くの大学の教員研修において広く活用されており、その有効性が確認されているからである（Gamson, 1991; Poulsen, 1991）。

「7原則」は、アメリカの学士課程教育において優れた教育実践を行うための原則と具体的な実践手法をまとめたものである。その開発のコンセプトは、①それまでの教育学研究の成果をふまえたもので、②誰でも覚えられるように5から9の原則に集約し、③原則が抽象的になりすぎないように配慮し、実践的な例を束ねた枠組みとしてまとめることで、④教員をはじめ事務職員、大学執行部など全ての大学関係者に届くような形でまとめることであった（Gamson, 1991）。その成果は、概要を示した小冊子と、学生用チェックリストの小冊子、教員用チェックリストの小冊子、大学組織用チェックリストの小冊子の4つの開発物から構成されている。7つの原則は、①学生と教員が接する機会を増やす、②学生間で協力する機会を増やす、③能動的に学習させる手法を使う、④素早いフィードバックを与える、⑤学習に要する時間の大切さを強調する、⑥学生に高い期待を伝える、⑦多様な才能と学習方法を尊重するから構成され、それぞれに対応する具体的な実践手法が整理されている。

最近になって、「7原則」は日本の高等教育研究においても紹介されている。中島・中井（2005）は、その概要と学生・教員・大学組織のそれぞれのチェックリストを紹介している。さらに、全米のさまざまな大学において「7原則」に沿って独自の実践手法がまとめられていることが紹介され、教員の実践手法の特徴がまとめられている（中井・中島, 2005）。

「7原則」に含まれた具体的な実践手法は、日本の大学の教育現場ではどれほどの有効性を持つものであろうか。米国において開発された「7原則」は、あらゆる学問分野の教員が利用可能なことをコンセプトとして作成された。また、普及の広がりを見る限り、多様な大学において有効であ

ったとも推測できる。このような学問分野や大学の属性を超えた教育改善の方法は、はたして国境をも越えて有効なのであるかというのが、本論の根底にある問題意識である<sup>1)</sup>。

## 2. 研究の目的と方法

本稿の目的は、「7原則」の学生・教員・大学の三種類のチェックリストを用いて、名古屋大学の教育実践の現状を明らかにするとともに、名古屋大学の現場で有効な教員・学生・大学組織の実践手法を明らかにすることにある。

上記の目的に対して次のような調査を実施する。まず、現状調査として、「7原則」の学生・教員・大学の三種類のチェックリストの項目を名古屋大学で「現在実践しているか」どうかを調査する。さらに、同項目を名古屋大学で「実践すべきか」どうかについて調査する。そして、両者の結果から、名古屋大学の現場で有効な教員・学生・大学組織の実践手法を明らかにする。すでに名古屋大学で実践されている場合は、実践すべきであると考えている項目であっても、有効性が高いとは言えない。なぜなら、教育改善のための指針として新たな気づきを与えないからである。本稿では、現状では実践していないが実践すべきであると考えている項目を有効性の高い項目と考えた。

こうした方法に沿って、本稿では以下の3つの調査を実施した。第一に、学生用チェックリストを用いた調査である。アメリカで作成された49項目からなる学生用チェックリストを用いて、名古屋大学の学生を対象に実践しているかどうかについて調査を行った。調査は、学部2年生が主に受講する2つの授業を利用し、出席した全学生を対象にアンケートを行った<sup>2)</sup>。全体で162人、文系と理系の比率は約1対2、男女比率は約4対1であった<sup>3)</sup>。さらに、その学生用チェックリストを用いて、教員を対象にそれぞれの項目を学生が実践すべきかについてアンケート調査を行った。学生が実践すべきかについては、学生自身よりも教員の方が適切に判断できるのではないかという考えのもとで、学部の授業を担当している教員12人にアンケート調査を実施した。回答する教員を抽出する際には、学部や年齢が偏らないように配慮した。

第二に、教員用チェックリストを用いた調査である。70項目からなる教員用チェックリストを用いて、教員を対象にそれぞれの項目を実践して

いるか、そしてそれぞれの項目を実践すべきかについてアンケート調査を行った。対象とした教員は、学部生対象の授業を持つ教員34人であり、約6割が文系教員で約4割が理系教員であった。担当科目の平均受講者数は70人程度であった。

第三に、大学用チェックリストを用いた調査である。66項目からなる大学用チェックリストを用いて、大学執行部を対象に現在取り組んでいるのか、また組織として取り組むべきかについて聞き取り調査を行った。対象としたのは、名古屋大学の教育の企画・実施・評価にあたって全学的に責任をもつ教員4人である。

以上の3つの調査方法についてまとめたものが表1である。各調査においては、自由記述意見も同時に回収した。

表1：調査の方法

調 査	対象	方法	調査内容
学生用チェックリストを用いた調査			
・学生の取り組みの現状	学生	調査票	49項目の内容を学生が取り組んでいるか
・望ましい学生像	教員	調査票	49項目の内容を学生が取り組むべきか
教員用チェックリストを用いた調査			
・教員の取り組みの現状	教員	調査票	70項目の内容を教員が取り組んでいるか
・望ましい教員像	教員	調査票	70項目の内容を教員が取り組むべきか
大学用チェックリストを用いた調査			
・大学の取り組みの現状	執行部	聞き取り	66項目の内容を大学が取り組んでいるか
・望ましい大学像	執行部	聞き取り	66項目の内容を大学が取り組むべきか

### 3. 調査の結果

#### 3.1 学生用チェックリストを用いた調査

学生用チェックリストを用いた調査では、現在どの程度実践しているかについて学生を対象に調査を行ったのに対し、名古屋大学の学生が実践すべきかどうかについては教員を対象とした。それぞれの回答は、「あてはまる」、「少しあてはまる」、「あてはまらない」、「答えられない」の4択である。表2では、「あてはまる」を2、「少しあてはまる」を1、「あてはまらない」を0、「答えられない」を欠損値として集計し、各実践手法について回答者の平均値を示した。実践手法は、名古屋大学の学生が実践している頻度の高い順に並べてある。この調査の結果は以下の通りである。

第一に、学生用チェックリストの実践手法において、名古屋大学大の学

生は約4割の実践手法に既に取り組んでいるという現状が明らかになった。現在どの程度実践しているかという問いについて、「少しあてはまる」から「あてはまる」との回答を得た実践手法（平均値が1.0～2.0）は、49項目のうち20項目にのぼる。

第二に、学生用チェックリストの実践手法について、教員はほぼすべての項目について実施すべきであると考え、現在の学生の実践状況よりも高い実践を期待していることが明らかにされた。学生の現状と教員の期待を比較して差の大きい項目は、「授業についていけるかどうか不安な時は、教員に相談する」（差が1.70）や「授業で学んだことについて、教員と議論をする機会をつくる」（差が1.61）などである。

第三に、学生の現状の中で多く実践されている手法は、原則7「多様な才能と学習方法を尊重する」であることが明らかとなった。これは、上位5項目に原則7に関するものが3項目あることからわかるが、その内容は「他の学生を困らせる行為をしない」「敬意を持って接する」「偏見なく考慮する」といった態度に関する項目である。

第四に、学生の現状として実践度の低い部分は、原則1「教員に接する機会を増やす」に関する項目であるという特徴が明らかとなった。これは、原則1の中に平均0.5未満の項目が5つあることからわかる。回答を7原則ごとにまとめた平均値を比較しても、原則1は平均が0.37で最も低い。一方で、実施すべきかどうかについては、教員に積極的に関わる学生像を教員が期待していることがわかる。これらの結果は、教員に接する機会について学生の現状と教員の期待の間に差があることを明らかにしたといえる。

第五に、学生の実践度と学業成績には一定の相関関係があることが明らかとなった。表3は、学生用チェックリストを用いた学生の現状調査の結果を、成績に占める優の割合ごとにまとめたものである。これによれば、成績に占める優の割合が高い学生ほど、多くの実践手法に取り組んでいる現状が読み取れる。49項目全体の実践の程度平均値も、優の割合が高いグループから低いグループの順に、0.93、0.89、0.81、0.60と順に低下している。特に、「自分の目標達成に向けて発展的な学習課題を進んでやる」、「課題はすぐに取りかかり正確に行う」、「クラスメイトと友達になるように努めている」、「履修している授業について計画通りに勉強する」などは、成績の上位の学生と下位の学生によって実践の度合いが大きく異なる項目であることが明らかにされた。

表2：学生の実践手法の取り組みの現状と教員が考える望ましい学生像

番号	学生用の実践手法	現在実践	実践すべ	差
		している (学生)	きと思う (教員)	
7-1	他の学生を困らせるような行為をしない	1.80	1.92	0.12
5-5	授業には休まずに出席する	1.64	1.62	-0.02
2-5	クラスメイトが優れた成果を出したと思った時は賞賛する	1.51	1.62	0.11
7-4	学習歴や学力水準の異なる他の学生にも敬意を持って接している	1.47	1.92	0.45
7-7	自分と異なる意見について偏見なく考慮する	1.44	1.77	0.33
3-7	授業中は丁寧にノートをとる	1.37	1.62	0.25
2-2	授業中に他の学生と一緒に勉強する	1.33	1.58	0.26
2-1	クラスメイトと友達になるように努めている	1.31	1.69	0.38
6-5	本当に学びたいことと、単位のための勉強とのバランスに注意を払う	1.29	1.31	0.02
2-4	求めに応じて他の学生をサポートする	1.23	1.62	0.38
7-3	自分自身のことや得意な勉強方法について他の学生と情報交換する	1.18	1.69	0.51
7-2	教員の授業スタイルに合わせて学習のスタイルを変える	1.18	1.31	0.13
4-1	試験や課題のコメントから、自分の良い点・悪い点を確認する	1.16	1.62	0.45
2-3	友達とグループを作って課題に取り組んだり勉強する	1.14	1.38	0.24
5-2	課題を提出する前には見直し・推敲を行う	1.12	1.85	0.72
5-3	授業でプレゼンテーションをする前には練習をする	1.11	1.62	0.51
1-5	興味を持った教員の担当科目や専門領域について知りたいと思う	1.03	1.77	0.74
6-3	専攻や進路に直接関連しない授業にも興味を持ち続ける努力をする	1.03	1.46	0.44
4-5	クラスメイトからのコメントを尊重し、できるだけ取り入れる	1.03	1.38	0.36
2-7	自分が得意な分野では、すすんで他の学生をサポートする	1.02	1.62	0.59
3-4	授業で学んだことを活かせるような現実体験を求めている	0.93	1.50	0.57
5-7	自分の苦手な分野を意識して、その克服に努める	0.93	1.77	0.84
2-6	自分と立場や意見が異なる人と議論をする	0.91	1.85	0.94
7-6	人種・性差別や、攻撃的な言動・態度に気づいた時は、注意する	0.90	1.85	0.95
6-6	どの授業でも最善の努力を尽くしている	0.88	1.31	0.43
5-1	課題はすぐに取りかかり、正確に行う	0.83	1.85	1.02
6-7	勉強を進めるにあたって学内の施設・人材・資料を最大限活用する	0.81	1.69	0.89
4-4	授業や文献の内容でわからない点を自力で考えたり友達に相談する	0.78	1.85	1.06
6-4	自分の目標達成に向けて発展的な学習課題を進んでやる	0.74	1.85	1.10
5-4	履修している授業について計画通りに勉強する	0.72	1.38	0.67
6-1	授業を受ける際に自分の目標を設定する	0.69	1.67	0.97
3-3	授業の内容と課外での活動を結びつけて考えるようにしている	0.66	1.46	0.81
1-3	教員の説明・意見に納得がいかない時は質問をする	0.62	2.00	1.38
7-5	教員から少数意見を授業で出してほしいと頼まれた際は協力する	0.62	1.54	0.92
3-1	授業に関してわからないことがある時ははっきりとその旨を言う	0.58	1.85	1.26
4-6	勉強したことを振り返るように記録をつけておく	0.58	1.38	0.80
6-2	教員が示した授業目標に関する情報を集めようと努める	0.55	1.54	0.99
3-5	授業に向けて入念な準備をする	0.55	1.54	0.99

名古屋大学の教育の質向上に有効な教員・学生・大学組織の実践手法

4-2	わからないことは早めに教員に聞きに行く	0.51	1.92	1.41
3-2	授業についていく上で必要なことを教員に質問する	0.49	1.85	1.35
3-6	授業に関連する文献や研究プロジェクトを探す	0.39	1.46	1.08
1-7	履修した授業についての感想・コメントを教員に伝える	0.34	1.62	1.28
1-4	教員と授業の内容に関する話を授業時間外にする	0.25	1.46	1.21
4-3	文章を書く時は、教員からコメントをもらいながら書き直す	0.16	1.31	1.14
1-1	一人以上の教員と授業以外の場面で接する機会をつくろうとする	0.16	1.62	1.45
5-6	授業についていけるかどうか不安な時は、教員に相談する	0.14	1.85	1.70
1-6	教員が関わっている研究会などの催しに参加する	0.11	1.08	0.97
1-2	自分の課題・答案・作品について教員にコメントをお願いする	0.09	1.42	1.32
4-7	授業で学んだことについて、教員と議論をする機会をつくる	0.08	1.69	1.61

注：数値が1.5以上のものは網掛けにしている。

表3：学生の成績別の実践手法の取り組みの現状

番号	優の数が 3/4以上	番号	優の数が 1/2以上 3/4未満	番号	優の数が 1/4以上 1/2未満	番号	優の数が 1/4未満
	(N=29)		(N=63)		(N=54)		(N=15)
5-5	1.90	7-1	1.85	7-1	1.83	7-1	1.60
7-1	1.71	2-5	1.71	5-5	1.59	3-7	1.33
2-2	1.62	5-5	1.68	7-7	1.47	7-4	1.27
2-1	1.48	3-7	1.57	7-4	1.44	7-7	1.27
2-5	1.48	7-4	1.52	2-5	1.40	5-5	1.13
7-4	1.48	2-1	1.49	6-5	1.28	2-5	1.07
2-3	1.45	7-7	1.48	7-3	1.23	1-5	1.00
3-7	1.45	2-2	1.44	4-1	1.22	2-4	1.00
2-4	1.41	2-4	1.35	2-1	1.20	2-2	0.93
5-2	1.41	6-5	1.32	7-2	1.17	3-4	0.93
6-5	1.41	2-3	1.24	5-3	1.17	6-3	0.93
7-7	1.41	4-1	1.22	2-2	1.15	6-5	0.93
7-2	1.31	7-2	1.18	3-7	1.11	7-2	0.93
7-3	1.31	4-5	1.15	5-2	1.09	3-3	0.87
5-1	1.17	7-3	1.15	2-4	1.07	4-1	0.87
6-3	1.17	5-3	1.14	6-3	1.02	4-5	0.87
6-6	1.17	1-5	1.13	2-7	1.00	5-3	0.87
4-5	1.14	5-2	1.11	2-3	0.98	7-3	0.87
6-4	1.14	2-7	1.10	7-6	0.98	2-3	0.73
5-7	1.10	3-4	1.02	1-5	0.96	2-7	0.73
5-3	1.07	6-3	0.98	2-6	0.96	5-2	0.73
2-7	1.07	5-7	0.94	3-4	0.91	7-6	0.73
4-1	1.07	4-4	0.92	5-7	0.91	2-1	0.67



5-4	1.00	2-6	0.90	4-5	0.89	6-6	0.67
1-5	0.97	7-6	0.90	6-7	0.83	2-6	0.60
4-4	0.97	5-1	0.89	6-1	0.77	5-7	0.60
2-6	0.96	6-6	0.89	3-3	0.75	4-4	0.53
6-7	0.93	6-7	0.85	6-4	0.75	3-5	0.47
3-4	0.83	5-4	0.76	6-6	0.75	1-3	0.40
6-1	0.83	1-3	0.73	5-1	0.70	4-2	0.40
7-6	0.83	4-6	0.71	7-5	0.66	3-1	0.33
6-2	0.76	3-1	0.69	5-4	0.65	5-1	0.33
1-3	0.66	6-4	0.69	4-4	0.61	7-5	0.33
3-2	0.66	7-5	0.67	6-2	0.61	3-2	0.27
3-5	0.66	6-1	0.66	1-3	0.54	3-6	0.27
3-1	0.62	3-3	0.63	4-6	0.53	4-6	0.27
4-6	0.59	3-5	0.60	3-1	0.52	6-1	0.27
7-5	0.57	3-2	0.57	1-7	0.50	6-7	0.27
4-2	0.52	4-2	0.55	4-2	0.50	1-2	0.20
3-3	0.45	6-2	0.52	3-5	0.46	4-7	0.20
3-6	0.43	3-6	0.35	3-6	0.44	5-4	0.20
4-3	0.25	1-4	0.32	3-2	0.39	1-1	0.13
1-4	0.24	1-7	0.32	1-4	0.20	1-4	0.13
1-7	0.24	1-1	0.21	5-6	0.19	6-4	0.13
1-1	0.21	4-3	0.18	1-6	0.17	1-7	0.07
5-6	0.14	5-6	0.15	4-3	0.13	4-3	0.07
1-2	0.10	1-6	0.13	1-1	0.09	6-2	0.07
4-7	0.03	1-2	0.10	1-2	0.06	1-6	0.00
1-6	0.00	4-7	0.10	4-7	0.06	5-6	0.00

注:数値が1.0以上のものは網掛けにしている。

### 3.2 教員用チェックリストを用いた調査

教員用チェックリストを用いた調査は、名古屋大学で学士課程教育を担当している教員を対象に現在どの程度実践しているかと、名古屋大学の教員が実践すべきかの2つの観点から、「あてはまる」、「少しあてはまる」、「あてはまらない」、「答えられない」の4択で回答を得た。表4では、「あてはまる」を2、「少しあてはまる」を1、「あてはまらない」を0、「答えられない」を欠損値として集計し、各実践手法について回答者の平均値を示した。実践手法は、名古屋大学の教員が現在実践している頻度の高い順に並べてある。このアンケートの結果は以下の通りである。

第一に、教員用チェックリストの実践手法の中で名古屋大学の教員が実



践しているのは約4割であるという現状が明らかになった。現在どの程度実践しているかという設問について、「少しあてはまる」から「あてはまる」との回答を得た実践手法（平均値が1.0～2.0）が、70項目中29項目である。つまり、リストの項目にある取り組みが一定程度実践されていることが示されている。

第二に、名古屋大学の教員が実践すべきかどうかについては、70項目中65項目と大部分について教員自身から肯定的な回答（平均値が1.0～2.0）が得られた。教員用チェックリストの内容が、名古屋大学の教員に概ね受け入れられるものであることが明らかになった。

第三に、名古屋大学において現在大部分の教員が実践していないものの、多くの教員が実践すべきだと考えている手法がいくつか明らかになった。たとえば「授業開始後2週間までに担当授業の学生の顔と名前を覚える」、「試験やレポートは良い点・悪い点をコメントして返却する」、「大事な概念について意見・経験の異なる学生がお互いに話し合う機会を設ける」といった実践手法が該当する。

第四に、各実践手法の回答を7つの原則ごとにまとめて平均したところ、原則4「素早いフィードバックを与える」の実践の平均値が0.68と最も実践の度合いが低いという結果が得られた。個別の項目では、「学期の終了後に最終試験の成果について面談をする」、「学期の初めに事前テストを行う」、「学生に課題の進捗状況を記録させる」などにおいて実践度が低い。

第五に、名古屋大学の教員が実践すべきかとの問いに対して、否定的な回答を得た実践手法が存在することが明らかになった。「フルタイムで勉強することは、フルタイムで働くことに等しいことを説明する」、「学生が参加できる大学の組織に一つ以上所属するように働きかける」などがそれに相当する。自由記述意見では、「実践手法としての意味がわかりにくい」、「大学の組織形態に依存する」などの指摘があり、これらが否定的な回答に至った要因と推察される。また、実践可能な手法であるが、教員が実践する上で時間的コストが高い点などから受け入れられにくいと考えられる項目についても否定的な回答が多かった。具体的には、「学期の初めに事前テストを行う」、「学期の終了後に最終試験の成果について面談をする」などの項目である。

表4：教員の実践手法の取り組みの現状と望ましい教員像

番号	教員用の実践手法	現在実践 している	実践すべ きと思う	差
1-3	自分の考え方や過去の経験を学生に話す	1.71	1.74	0.03
4-1	小テスト・宿題を課す	1.68	1.82	0.14
6-9	授業内容を常に改訂する	1.59	1.88	0.29
7-1	授業が理解できないときはきちんと言うようにすすめる	1.59	1.88	0.29
7-9	学生が自分の興味・関心に基づいて専攻を決めることを奨励する	1.59	1.85	0.26
3-4	学生による調査・自主研究を奨励する	1.50	1.88	0.38
3-8	授業をよりよくするための学生の提案・アイデアを歓迎する	1.47	1.79	0.32
1-10	学生が問題に直面した際は、解決へ向けた手助けをする	1.47	1.73	0.26
3-5	自分以外の意見、文献や授業の資料を批判的に検討することを奨励する	1.35	1.70	0.34
6-3	学期の開始時に学生に期待することを述べたりシラバスに書く	1.35	1.68	0.32
3-1	授業の中で学生の課題を発表させる	1.33	1.61	0.27
6-1	学生に一生懸命勉強してほしいと言う	1.32	1.65	0.32
7-2	虚偽の発言、嫌み、冗談、他の学生の妨害行為をやめさせる	1.30	1.67	0.36
5-6	日常的な学習や学習の計画性の重要性を強調する	1.29	1.74	0.44
5-1	課題にはすぐに取り組むように促す	1.29	1.44	0.15
6-6	意欲的な学生向けに発展的内容の文献・課題を用意する	1.24	1.74	0.50
6-5	期限までに課題を提出できなかった場合の処置を説明する	1.24	1.59	0.35
2-8	授業の受講者でグループを作る	1.18	1.48	0.30
6-7	学生にたくさん書くことをすすめる	1.15	1.68	0.53
3-6	具体的で実社会・実生活に結びつく調査・議論・課題を設定する	1.15	1.56	0.41
7-8	自ら学習目標を立てる活動、コンピュータを活用した学習をとり入れる	1.13	1.47	0.33
5-9	学習習慣や学習計画の面でうまくいかない学生に会って相談にのる	1.12	1.67	0.55
1-7	自分と異なる人種・文化背景の学生の支援に努力する	1.12	1.71	0.59
2-3	学生が共同プロジェクトを行うように働きかける	1.06	1.45	0.39
6-8	優れた成果をあげた学生は授業ではめる	1.06	1.55	0.49
5-7	学生に欠席しないことの重要性を説明する	1.06	1.41	0.35
7-10	学期の初めに学生の学習スタイル、興味・関心、過去の経験を知る努力をする	1.03	1.59	0.56
7-7	自主的な学習をしたい学生向けの課題・テーマを用意しておく	1.00	1.56	0.56
5-10	授業を欠席した場合は、自習などで追いつくことを求める	1.00	1.50	0.50
2-7	大事な概念について意見・経験の異なる学生がお互いに話し合う機会を設ける	0.97	1.71	0.74
6-4	学生が意欲的な目標の設定を支援できるよう支援する	0.97	1.62	0.65
1-1	将来の進路について学生にアドバイスをする	0.97	1.42	0.45
7-4	学生の過去の経験にあわせて適切な文献や学習活動を選ぶ	0.97	1.52	0.55
5-4	学生に高い到達目標を立てることをすすめる	0.94	1.41	0.47
4-3	テスト・レポートを1週間以内に返却する	0.91	1.63	0.71
2-5	難しい概念をお互いに説明し合う活動を取り入れる	0.91	1.47	0.56
2-1	学生に自分の興味や過去の経験をお互いに話すよう求める	0.88	1.29	0.41
4-2	学生が自分で答えを合わせられる宿題・問題を用意する	0.88	1.25	0.37
4-6	試験やレポートは良い点・悪い点をコメントして返却する	0.85	1.63	0.77

## 名古屋大学の教育の質向上に有効な教員・学生・大学組織の実践手法

4-4	学期の初めのうちは課題の評価・コメントを詳細かつ丁寧に行う	0.85	1.47	0.62
3-2	異なった理論、研究上の知見、芸術的作品の類似点・相違点を要約させる	0.82	1.53	0.71
7-5	予備知識などが足りない学生用に補習教材・問題を用意する	0.82	1.53	0.71
1-2	学生が研究室に遊びにくる	0.82	1.24	0.42
2-4	課題をお互いに評価し合う活動を取り入れる	0.79	1.42	0.64
7-6	女性やマイノリティに関する新しい動向を授業に取り入れる	0.76	1.37	0.61
5-5	プレゼンテーションの際に事前にリハーサルをさせる	0.74	1.45	0.72
7-3	多様な学生にあわせて多様な学習活動を用意する	0.74	1.38	0.64
1-8	学生とは先輩・非公式のアドバイザーとして接する	0.73	1.15	0.41
3-3	授業に関連する学外のイベントや活動に関わるよう求める	0.71	1.30	0.60
2-6	課題ができたときにお互いにはめる機会を設ける	0.71	1.27	0.57
6-10	学期中は授業改善について定期的に学生と議論をする	0.68	1.38	0.71
2-2	授業の予習や試験勉強をクラスメイトと一緒に行うよう促す	0.68	1.21	0.54
6-2	授業で良い成績を取ることの重要性を強調する	0.68	1.03	0.35
4-5	学生に課題の進捗状況を報告させる	0.65	1.25	0.60
3-7	シミュレーション、ロールプレイ、実験を行う	0.64	1.21	0.58
3-9	授業に関連するフィールド調査、ボランティア活動、インターンシップを紹介する	0.62	1.12	0.50
1-9	学生を自分の専門領域における学会などに連れて行く	0.59	1.06	0.47
1-4	学生が主催する行事・勉強会などに参加する	0.53	1.06	0.53
2-10	他の学生への協力が自分の成績を下げるにつながらないと学生に伝える	0.52	1.27	0.76
5-2	授業の予習に必要な時間を示す	0.39	1.00	0.61
5-3	難しい内容には理解のために必要な学習時間を示す	0.39	0.84	0.45
1-6	授業開始後2週間までに担当授業の学生の顔と名前を覚える	0.38	1.33	0.95
4-10	欠席した学生に電話・掲示など連絡をする	0.38	0.79	0.41
1-5	顧問や相談員として学生の課外活動に積極的に関わる	0.36	1.09	0.73
3-10	学生を研究プロジェクトに参加させる	0.32	1.03	0.71
4-8	学生に課題の進捗状況を記録させる	0.26	1.03	0.77
5-8	フルタイムで勉強することは、フルタイムで働くことに等しいことを説明する	0.24	1.12	0.88
4-7	学期の初めに事前テストを行う	0.24	0.81	0.58
2-9	学生が参加できる大学の組織に一つ以上所属するよう働きかける	0.19	0.77	0.58
4-9	学期の終了後に最終試験の成果について面談をする	0.06	0.91	0.85

注:数値が1.5以上のものは網掛けにしている。

### 3.3 大学用チェックリストを用いた調査

大学用チェックリストを用いた調査は、名古屋大学の教育の企画・実施・評価にあたって全学的に責任をもつ4人の教員を対象に聞き取り調査を実施した。チェックリストの項目に対し、現在どの程度取り組んでいるのかと、組織として取り組むべきかの2つの観点から、「あてはまる」、「少しあてはまる」、「あてはまらない」、「答えられない」の4択で回答を得た。調査対象数が少ないため、「あてはまる」を○、「少しあてはまる」

を△、「あてはまらない」を×、「答えられない」を空白として回答結果を全て表5に示した。A～Dは4人の回答者を示す。

第一に、回答者によってばらつきは見られたが、大学用チェックリストの実践手法の中で半数程度の項目については、名古屋大学として既に取り組んでいる、もしくは少しは取り組んでいるとの回答が得られた。ただ、回答者全員が「あてはまる」と回答した項目は、3項目にすぎなかった。

第二に、大学用チェックリストを使った現状の取り組みの度合いにはばらつきがあったが、組織として取り組むべきかという質問に関しては、概ね「あてはまる」もしくは「少しあてはまる」の回答が得られた。「定期昇給が教育成果と関連している」、「学生向けのタイムマネジメントセミナーを行う」、「教育目標が行動目標で表現されている」などの項目は現状の取り組みの度合いは低いが、組織として取り組むべきであるという回答が多かった。また、「このようなチェックリストを使うと大学で不十分な取り組みがよくわかる」という自由記述意見もあった。

第三に、少ない項目においてであるが、大学として取り組むべき必要性がないと判断された項目があった。具体的には、「非常勤講師が授業以外の活動に参加している」、「学生、教員、職員が必要な数だけ備えた駐車場がある」、「娯楽施設や運動施設が夜間、週末も開いている」などである。これらはアメリカの大学の制度や文化を背景に開発された項目であるため、名古屋大学の文脈においては必要性の低い内容の項目であると判断されたのであろう。

表5：大学の実践手法の取り組みの現状と望ましい大学像

番号	大学用の実践手法	取り組んでいる				取り組むべきである			
		A	B	C	D	A	B	C	D
学習環境									
1-1	学生と教員が授業時間外に面会の機会を持てる	×	△	○	×	○	○	○	○
1-2	学部や全学の委員会に学生の代表が出席する	×	×	△	△	○	○	○	○
1-3	学内の研究者の優れた研究成果について学生が知っている	○	○	△	△	○	○	○	○
1-4	社会的弱者の教員・職員・学生を受け入れる	△	△	×	△	○	○	○	○
1-5	執行部が組織運営に対する学生や教員の貢献度を知っている	○	△	×	×	△	○	○	○
1-6	大学の出版物は学生・教員・職員の多様な活動を反映している	×	×	△	×	○	○	○	○
1-7	教員が学生の高い成果を引き出せるよう事務組織が支援する	△	△	×	×	△	○	○	○
1-8	学長や執行部に教員や学生がコンタクトできる仕組みがある		×	×	×		○	△	○
1-9	教員と事務組織が快適なキャンパスづくりに努力する	○	△	△	×	○	○	○	○
1-10	事務長、学部長、学科長が協力関係を作る	○	○	○	○	○	○	○	○
1-11	教職員が一生懸命働いていることを学生が知っている		△	△	△		○	○	○

# 名古屋大学の教育の質向上に有効な教員・学生・大学組織の実践手法

## 授業実践

2-1	授業を受講するにあたり、学生の予備的知識が十分であるかどうか確認している	△ △ × ×	△ ○ ○ ○
2-2	大学が授業と家族サービスや課外活動とのバランスに関する見解を持っている	× × ×	○ ○ ○
2-3	男性職員と女性職員の所得の差を公表する	× × ×	○ ○ ○
2-4	大学が卒業生の進路・キャリアを把握している	△ △ × △	△ ○ ○ ○
2-5	学生が開講授業を評価し、改善を提案できる機会がある	△ △ × △	△ ○ △ ○
2-6	不可の成績の上限数を大学が決めている	× × × ×	○ △ △
2-7	成績評価の明確な基準を教員が持っている	△ × × △	△ ○ ○ ○
2-8	大学は必要に応じて会議で検討中の内容を学生に伝えている	○ × × ×	△ ○ △ ○
2-9	非常勤講師が授業以外の活動に参加している	△ × ×	△ △ ×
2-10	大学が学生の成長を評価している	△ △ ×	○ ○ ○
2-11	スポーツ選手も他の学生と同等の学習を期待されている	○ ○ ○	△ ○ ○ ○

## カリキュラム

3-1	実践的な実務経験、研修の機会を与える科目がある	× △ △ △	○ △ ○ ○
3-2	教員が教養課程の内容を検討し改訂する	△ △ × △	△ ○ ○ ○
3-3	教員が専門課程の内容を検討し改訂する	○ △ ○ ○	△ ○ ○ ○
3-4	コンピュータを活用した学習など主体的に学習できる機会がある	△ △ △ ○	△ ○ ○ ○
3-5	新入生が参加する特別プログラムがある	○ △ ×	○ ○ ○
3-6	学生がインターンシップや就業体験できる機会がある	○ ○ △ △	△ ○ ○ ○
3-7	教員と学生が卒業までに身につける知識・スキル・態度を共有している	△ △ × ×	△ ○ ○ ○
3-8	学生が自ら専攻を決められる	○ △ ○ △	× ○ ○ ○
3-9	学生が学際的な専攻に進むことができる	○ × ○ ×	× ○ ○ ○
3-10	多様な文化の価値を学ぶプログラムに学生が参加している	△ △ ×	○ ○ ○
3-11	学生が科目間の関係を理解するのに役立つ学習コミュニティやセミナーがある	○ △ × △	△ ○ △ ○

## 教 員

4-1	学生が会えるよう平日は教員がキャンパスにいる	○ △ △ ×	○ ○ △
4-2	成績評価は各教員が明確な基準に基づいて行っている	○ △ △ △	△ ○ ○ ○
4-3	教員が新たな教授法を試したり支援を受ける時間的余裕がある	× × × ×	○ ○ ○ ○
4-4	教員が授業の成果についてフィードバックを受けたり与えたりする	△ △ △ ×	△ ○ ○ ○
4-5	学外でのコンサルタント活動等に関する制限が議論されている	○ △ △ ×	△ ○ ○ ○
4-6	教員は学問的な指導を真剣に行っている	○ ○ △ △	△ ○ ○ ○
4-7	定期昇給が教育成果と関連している	× × × ×	○ ○ △ ○
4-8	教員が学生課の職員と協力して働いている	× △ △	○ ○ ○
4-9	大学が、教員の労働時間が合法的な範囲におさまるよう指導をする	× × ×	○ △ ○
4-10	教員が長期計画、予算、人事など重要な意思決定に参加する	○ ○ ○ ×	△ ○ ○ ○
4-11	執行部の教育への貢献を教員が評価している	× × ×	○ ○ ○

## 学生支援サービス

5-1	学生の様々な相談にカウンセリングサービスが対応する	○ ○ ○ △	○ ○ ○ ○
5-2	学生が論文・レポートの執筆指導を受けられるサービスを提供する	○ △ × △	△ ○ ○ ○
5-3	学生向けのタイムマネジメントセミナーを行う	× × ×	○ △ ○
5-4	成績不振の学生に学習支援を行うプログラムを提供する	△ × × △	△ ○ △ ○
5-5	学生課、学務課、学生自治会が協力してオリエンテーションプログラムを実施する	× △ △ ×	△ ○ ○ ○
5-6	学生が他の学生のチューターやアドバイザー等として活躍している	○ △ △ △	△ ○ ○ ○

5-7	学生が財政的援助に関して専門家から支援を受けられる	△	×	△	×	△	○	○	○
5-8	教育目標が学生の行動目標で表現されている		△	×	×		○	○	○
5-9	学生が在学中は同一のアドバイザーから指導を受けられる		△	×	×		△	○	○
5-10	大学が学生の多様性に対応できるよう教員・職員・学生に研修を行う	△	×	×	×		○	○	○
5-11	奨学金は期限までに申し込んだ学生には授業開始時に支給されている	×	△	×	×	×	△	○	○

#### 施設・設備

6-1	教室の机・椅子が可動式である	△	×	△	△	×	○	○	○
6-2	学生と教員が面会できるラウンジなどが整備されている	○	×	×	△	×	○	○	○
6-3	静かで集中できる学習スペースがある	○	△	△	△		○	○	○
6-4	娯楽施設や運動施設が夜間、週末も開いている	×	△	×	×	×	○	○	×
6-5	食堂が日中・夜間通じて開いている	×	△	×	×	×	△	○	○
6-6	学生が自由に使えるビデオ視聴室、実験室、芸術活動用の施設がある	△	△	△	×	△	○	○	○
6-7	大学のコンピュータを利用できる	○	○	○	○	△	○	○	○
6-8	学生、教員、職員が必要な数だけ備えた駐車場がある	×	×	×	×	×	×	△	×
6-9	日中・夜間に使用できる公共交通機関がある	○	○	○	○	○	○	○	○
6-10	学期中は図書館が週末・夜間も利用可能である	○	○	×		○	○	○	○
6-11	夜間コースの学生のために事務室が夜間も開いている	△	×	×	×	×	○	○	○

注:○は「あてはまる」、△は「少しあてはまる」、×は「あてはまらない」、空白は「答えられない」を表している。

## 4. 得られた示唆と今後の課題

以上の調査結果から得られた示唆は、次の通りにまとめられる。まず、米国版の「7原則」に示された実践手法が、名古屋大学においても概ね実施が望ましいと見なされていることが明らかにされた。これは、各チェックリストに示された実践手法を取り入れるべきかという問いに対して、全般的にみて肯定的な回答が多かったことから言える。現在ほとんど実践していないが実践すべきであるとの回答を得た実践手法も少なくなく、現状の教育実践を改善する方針としても有効であると言える。そして、成績に占める優の割合が高い学生ほど多くの実践手法に取り組んでいることもわかり、学習成果と実践の間の相関関係が明らかとなった。

一方で、米国版の「7原則」に示された実践手法の中には、名古屋大学において有効ではないと考えられる内容も明らかにされた。たとえばアメリカの大学の制度や文化を背景に開発された手法がこれに該当する。また、時間的理由などから実現可能性を疑問視された実践手法も明らかにされた。

これらの調査結果によって、名古屋大学の教育の質向上に有効な教員・学生・大学組織の実践手法が明確にされつつある。有効な教員・学生・大



学組織の実践手法が明らかにされれば、大学教育の質を向上するための新たな方法論が提供できると思われる。現在、多くの大学でファカルティディベロップメントが叫ばれているが、それは大学教育の質向上を教員個人の資質向上という手段のみに大きく依存することにもなりかねない。しかし、カリキュラムの整備や教育環境などの大学の組織的な取り組みや、主体的に大学教育に参加しようという学生の姿勢なしには、教育の質向上は達成できないであろう。つまり、本研究の成果は、教育活動に関わる主体としての学生・教員・大学の三者の役割、責任、およびその相互関係を明らかにすることにつながり、特定の主体の努力に過度に依存しない教育の質向上の方法論を開拓できる可能性がある。この方法論の開発に関しては今後の重要な課題としたい。

一方で他の課題も残された。それは、本調査を名古屋大学の詳細な現状分析よりも研究開発という側面に重点を置いたことに起因する。本調査は対象者数という点では大規模なものではない。そのため、大まかな全体傾向は明らかになったが、属性が与える影響や項目間の相互関係について明らかにするまでに至らなかった。また、今回は対象学生も2年生前期の学生に絞ったが、大学4年間を通してどのような実践の変化があるのかを明らかにすることも意味があると考えられる。これらの課題は、名古屋大学により適した項目リストを作成してから、本格的な調査を実施して明らかにされるべきであると考ええる。

## 注

- 1) 本研究の成果やその他の研究に基づき、2005年9月に『ティップス先生からの7つの提案』を開発することができた。その内容は、3冊子（名古屋大学高等教育研究センター、2005a, 2005b, 2005c）および高等教育研究センターホームページ（<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>）で公開している。その開発プロセスは、名古屋大学高等教育研究センター（2005d）にまとめられており、本研究の位置づけも記されている。
- 2) 2005年4月19日に開講された文系教養科目と理系教養科目の2つの授業内においてアンケートを実施した。
- 3) 学生の所属している学部は、文学部、教育学部、法学部、経済学部、情報文化学部、理学部、医学部、工学部、農学部である。



## 参考文献

- 中井俊樹・中島英博（2005）「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号, 283－299頁
- 中島英博・中井俊樹（2005）「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」『大学教育研究ジャーナル』第2号, 71－80頁
- 名古屋大学高等教育研究センター（2005a）『ティップス先生からの7つの提案〈学生編〉』
- 名古屋大学高等教育研究センター（2005b）『ティップス先生からの7つの提案〈教員編〉』
- 名古屋大学高等教育研究センター（2005c）『ティップス先生からの7つの提案〈大学編〉』
- 名古屋大学高等教育研究センター（2005d）『「ティップス先生からの7つの提案」の開発』特色G Pシリーズ3号
- Astin, A. (1984) “Student Involvement: A Developmental Theory for Higher Education”. *Journal of College Student Personnel*, 25, pp.297－308.
- Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) “Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education”, *AAHE Bulletin*, 39 (7), pp.3－7.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. (1989a) *Faculty Inventory*, the Seven Principle Resource Center, Winona State University.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. (1989b) *Institutional Inventory*, the Seven Principle Resource Center, Winona State University.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. (1992) *Student Inventory*, the Seven Principle Resource Center, Winona State University.
- Feldman, K. (1997) “Identifying Exemplary Teachers and Teaching: Evidence from Student Ratings” in Perry, P. and Smart, J. (Eds.), *Effective Teaching in Higher Education: Research and Practice*, Agathon Press.
- Gamson, Z. (1991) “A Brief History of the Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education”, *New Directions for Teaching and Learning*, No.47, pp.5－12.
- Poulsen, S. (1991) “Making the Best Use of the Seven Principles and the Faculty and Institutional Inventories”, *New Directions for Teaching and Learning*, No.47, pp.27－35.
- Sorcinelli, M. (1991) “Research Findings on the Seven Principles”, *New Directions for Teaching and Learning*, No.47, pp.13－25.